

Infinite Dendrogram
罪と禍いの獣たち

ペイルカイザー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

この小説は私がTwitter上で交流していた方との中で生まれた「レイが王国ではなく皇国に所属していた場合に生まれる皇国犯罪者クラン」のメンバーについて書いていく小説です。基本的にはインフィニットデンドログラム本編を既読の方向けに書いているので初心者向けではありません。

また拙い文章が続きますが懲りずに読んでいただければ幸いです。

目次

【屍將軍】 ジョージ・ンザンビ | 1

【屍将軍】 ジョージ・ンザンビ

6月14日 AM06:30

今日も私は目を覚ます。目覚まし時計を止めて、顔を洗ってパパとママに朝の挨拶をする。朝ごはんを食べて、仕事場に向かうパパと一緒にママに行ってきますの挨拶をする。

私の名前は樺根・四季。今年で中学二年生。部活動は文芸同好会とテーブルゲーム愛好会。最近夢中なものはオンラインゲーム「Infinite Dendrogram」通称デンドロ。一年前に発売されたこのゲームは今私がいちばん好きなゲーム。だってこのゲームはなりたい自分になれるゲーム。なりたい自分でいられるゲームなの。今日も部活が終わって家でご飯を食べたらログインする予定です。

え？今の自分じゃダメなのかって？ダメだよ。ダメダメ。だって私のなりたい私は、とつても悪い子だもの

Infinite Dendrogram内時間

6月14日 PM19:30

今日も私はデンドロにログインしました。ログインして降り立った場所はデンドロにある国の一つ、黄河帝国です。現実での中国っぽい雰囲気の中で龍の国とも呼ばれています。今私がいるのは黄河帝国の首都「龍都」近郊の草原。

そして今、デンドロの世界にいる私の名前はジョージ・ンザンビ。こことは違う別の国に所属するプレイヤー＝マスターです。今日のファッションは黒いゴシック風ドレスの要所に装甲を追加した装備。手持ちの中でも逸品の部類に入ります。それに持っているアイテムの中では一番おしやれです。

だって今日はデートですから♪

「お待たせしましたリオウさん。行きましょう。」

私の隣に立っている人が今日のお相手。リオウ・ハンさんです。背は私よりちよつぷり高い162cmほど。黒髪に蒼い眼をしたアジア人風の顔立ち。身につけているのはゆつたりとした道着のような衣服、背中には2mほどの槍。ジョブは「戦騎王」という超級職です。彼はマスターではなくティアン。このデンドロの世界に生きる人々、NPCなのです。そして彼こそ、私の愛しい人。

「ふふん、今日はですね〜まずは中央ストリートにあるお茶屋さんでお茶をして〜その後は服屋さんでのショッピングにも付き合っただけです！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

リオウさんは寡黙です。でもそこが素晴らしい魅力だと思えます！今日は寝るまでリアルで三時間、こつちでは九時間は一緒にいられます。さつき言ったデート以外にも一緒に狩りに出かけたリクランのみんなのところにも顔を出したいのです。

「待てその女あー！」

「はい？」

そこにいたのは昔モンゴルなどにいた遊牧民族が着ていたような民族衣装を纏った女性。片手にはリオウさんが持つのと同じ意匠の槍。

「何故その方がここにいます！リオウ・ハン様は死んだはずだ！」

「あららく？もしかしてリオウさんの同族の方ですか？おかしいですね。私ったら、全員殺したと思つたのに。」

「質問に答えろ！」

「・・・・・・・・まったく、せつかくのデートが台無しですよ。」

「リオウさん、お願いしますね？」

「御意・・・・・・・・。」

「リオウ様！？私です、ハリウです！あなたと同じ部族の、【大戦騎兵】ですよ！同じ年に生まれ、育ってきたではないですか！」

私の言葉を合図にリオウさんが女性へと攻撃を仕掛けます。女性も槍を構えて応戦しますが、リオウさんには劣ります。素人目にもわかる劣勢。その女性の言葉が届くことはありません。だってリオウさんは私のもの。私の言葉だけが届く。

「やっちやえ、リオウさん。」

「貴っ様あああああ!」

わあ、よく凌いでますね。リオウさんは結構強いと思うんですけど。でも、

「ぐあああああつっつ!!」

「黄河二元最速の超級職には勝てませんよ?」

決着は20合にも満たない槍撃の果てにリオウさんが勝ちました。当然ですね。私が認めた、私の最愛の人。それこそがリオウ・ハンさんですから。ハリウさんと名乗った女性は両腕を槍で吹き飛ばされています。

「貴様、リオウ様に何をした……!」

「しつこいですねえ。ただリオウさんには私の理想になってもらったんですよ。」

「……は?」

「私、死んだ人が好きなんです。愛してるんです。だからリオウさんを、」

話しながら腰から一振りの小太刀を抜く。黒に近いほどに濃い濃緑色をした刀身に刻まれた「八房」の二文字。これが私のエンブリオ。私自身の願いが形になった存在。

「これで刺したんです。【死軍行脚 ヤッフサ】これでHPを0にされたモンスターやティアンは、みんな私のモノになっちゃうんです。モンスターなら生前のステータスをそのまま。ティアンならジョブやスキルを持ったまま私のモノにできるんです。」

「そんな、ではリオウ様は死んでいるというのか！ 貴様はまさか、そのためだけに我が一族を滅ぼしたというのか！」

「そうですよ。だって、欲しかったんですもの」

そう、リオウさんは黄河の草原地帯に住む遊牧民族でハンと呼ばれる族長でした。偶然彼とクエストで知り合った私は彼が欲しくなってしまうたんです。でも、そのためには彼を殺すしかありません。

だからモンスター大量発生クエストに彼と行きました。結果は彼も私も満身創痍。その彼の心臓を、後ろからヤッフサで刺したんです。

後は彼が死んでもバレないように遊牧民族の方々には死んでもらったんですけど、まさか生き残りがいるとは思いませんでした。

「安心してくださいね。貴女は殺しませんよ？」

「くっ、殺せ！ 戦士の恥を晒すくらいならばここで死ぬ！」

「そう言わないでくださいよ。」

「そのとおおりつで〜すね〜」

あ、ヨゼフさんだ。この人は今日合流予定だった私が所属するクランのサブオーナーさんです。

「ンザンビくこのティアンは貰ってもいいですかあ？新しい交配実験用素体が欲しかったんです。」

「いいですよ。私この後デートなので。」

もう興味はない。この人はもう戦えないし私を追うこともできない。なら今日の予定を過ぎそう。

「楽しみです、リオウさん♪」

「……………(こくり)」

私は今日も彼と過ぎす。私は異端なのでしょう。私は狂っているのでしょうか。それでも私は、彼といたい。それが私、

【屍將軍】 ジョージ・ンザンビなのだから